志賀直哉・武者小路実篤・里見弴書簡の紹介

―野田宇太郎文学資料館所蔵書簡翻刻(10)―

原武哲

一　志賀直哉書簡

1

野田宇太郎はいつから志賀直哉と交流するようになったのだろうか。野田の『灰の季節』（修道社、一九五八年五月五日）によると、「（一九四四〈昭和一九〉年）十月十二日――その会場で志賀直哉氏に久しぶりに挨拶した。かつて移転の加勢をしたこともあつてよく覚えてゐられた。近日中に伺ふと約束する」とあるので、以前、「移転の加勢」したことがあるとは、一九四〇（昭和一五）年五月志賀直哉が東京市世田谷区新町二ノ三七〇に家を求め、増築の上移転した時、野田が移転の手伝いに来たのであろうか。野田は同年五月、久留米市役所を退職、上京して小山書店に入社して、『新風土』六月号より編集に携わっている。従って、上京早々の野田は志賀の転居手伝いをして、『新風土』八月号に原稿を依頼したのであろう。志賀は同誌に「牧野醇長篇小説「罪」について」を書いた。このように志賀直哉と野田宇太郎との交流は一九四〇（昭和一五）年の五月ごろから始まったと思われる。志賀は一九四二年五月『新風土』第四五号に「鰐狩紳士」を掲載、同年七月小山書店より短編集『早春』を刊行したが、いずれも野田が関係していることと思われる。

一九四三（昭和一八）三月、野田は編集方針の衝突で小山書店を退社し、長谷川巳之吉の経営する第一書房に入社して『新文化』を編集することになった。しかし、一九四四年二月、第一書房は突然解散廃業、失業したが、幸い同年四月河出書房に入社することができ、『文藝』編集に専念した。

一九四四（昭和一九）年一一月八日、野田宇太郎は世田谷区新町の志賀直哉宅を訪ねた。志賀は「『文藝』は昔の雑誌のようでいいよ」と励ましてくれた。志賀が親しくもてなしてくれたので、野田もすっかりくつろいだ気持ちになった。

一九四五（昭和二〇）年一月一三日、野田宇太郎は志賀直哉を訪ね、中野重治から託したプラトンインキを渡した。これはある会合の雑談で、志賀が何か書きたいと思ってもインキがないので書けない、と言っていたのを野田が中野に話すと、中野はまだ志賀に会ったことはないが、「志賀さんに一本差し上げてください」と当時貴重品になっていたプラトンインキ大瓶一本を野田に託けたのであった。志賀はインキ自体には思ったほど喜ばなかったが、中野の好意を大変喜んだ。志賀は小林多喜二の悲惨な獄死に正義派らしい同情を寄せており、中野のことは小林を通じて間接的に知っていたので、中野も志賀に対して特別な関心を持っていたらしい。一本のインキを仲介として志賀・中野の二人を結び付けたのである。

この日から数日前、志賀直哉宅を訪ねた時、志賀がかわいがっている鵲（かささぎ）が近所の子供の空気銃に撃たれて、大怪我をした。この日、弾はいったままだが、どうやら鳴くようになったと言う。しかし、薬もないのでかわいそうだと心配そうだった。

一九四五年三月一九日、連日の空襲、戦争も末期的状況を呈してきた。野田は志賀に『文藝』の原稿依頼をしていたが、なかなか書けなかった。その代わり志賀は網野菊を推薦した。野田は家族を疎開させたいが、『文藝』編集の仕事から離れられず、豊島与志雄、志賀直哉宅に原稿を求めて訪ね歩いた。

同年三月一〇日の東京大空襲の後、野田は知り合いの文学者の状況を日記に書いた。その中で志賀直哉について、空襲の翌日、野田が電車の窓から見ていると、志賀が娘と二人、白髯を光らせて防空服装で元気に下町の方へ歩いていた。町中はまだきな臭く、人々の眼は怒りに燃えていたが、野田は、志賀が力強く若い足

取りで自宅から遠い焼け跡を歩く姿を発見して、いよいよ仕事をしてもらえるのだと確信し、胸をときめかした。

それより先、二月二二日、栗山理一の紹介で平岡公威という学生が河出書房に野田を訪ね、小説の原稿を置いて行った。間もなく自費出版した『花盛りの森』という小説集を持って来た。その後、しばしば来訪し、野田は平岡の単純で未熟だが青年らしいロマンチックな空想性の中にも、才能の豊かさを認め、『文藝』第七号に「エスガイの狩」を載せた。学生は三島由紀夫といった。三島は「エスガイの狩」を発表する前、志賀にも原稿を見てもらっていた。後に志賀は「あの小説は夢とか嘘ばかり書いていて面白くなかった。僕はあんなのを認めない」と言った。三島は作品集を出したいが出版社はないかとか、用紙はこちらが持つので出版する社はないかとか戸惑うことを言った。終戦間近い頃、三島は野田に、川端康成に紹介してくれと言った。引き受けた野田は鎌倉の川端に会い、名刺を持たせるので会ってもらうように頼んだ。三島は川端の推薦で『人間』に新人として登場し、たちまち文壇の寵児となった。そして二度と野田のところに姿を現わさなかった。

ソ連が参戦した日、野田は重苦しいニュースを志賀邸で聞いた。終戦後、野田が志賀を訪ねた折、志賀は秋田に疎開した武者小路実篤から便りが来るので、自分も東京の便りを武者小路に書きたいと言いながら、GHQの言論検閲下ではままならなかった。

秋田に疎開していた武者小路から志賀には定期的に便りがあった。やがて敗戦、野田が志賀邸を訪ねた時、占領下の東京の状況を武者小路に書きたいと志賀が言ったので、野田はその話を聞き、二人の手紙を文学的に生かしたいと思って、「その手紙を私にいただけませんか。武者小路さんとも連絡をとって、両方から田舎と東京の終戦状況を語り合うということで」と言った。二人の文学者の手紙は単なる身辺消息の域を脱して、混沌の度を濃くして行く日本社会に対する文明批評であり、志賀はすぐ承諾し、武者小路も賛成した。二人の手紙は直接野田に送られ、野田はそれを書き写し、それぞれ宛先に送られた。

第一信は秋田県稲住の武者小路から六月一二日付で志賀に送られた「遠くはなれて東京の様子がよくわからないので気にしてゐる」で始まる手紙だった。それに対して志賀は伊豆の大仁から六月二七日の返事で「僕は此月の六日東京を出て八王子の滝井のところに一泊八王子発の早い汽車で信州伊那の高遠といふ所へ行つて見た。」と書かれていた。第二信も武者小路の「君の大仁からの手紙うれしく見た。」という書き出しで七月一四日付である。「稲住はさすがにまだ警報が出ない、下の方ではさわいでゐると聞くが」という言葉があり、疎開先の山深い里であることをしのばせていた。ここまでの三通は戦争中の消息である。

敗戦一ヶ月後、志賀の返事は東京世田谷から九月一九日付で「東京は進駐軍の物騒な話も少しはあるが、兎に角空襲がなくなったので、日々の生活は非常に楽になった。」と終戦直後の東京の混乱状態に対する感想と消息が述べられている。「手紙」を『文藝』第九号（一九四五年一〇月）に組み込む時、野田は志賀と武者小路の名のどちらを先にするかについて相談した。野田は志賀の手紙が主体であるから、志賀の名を先にしようと言うと、「いけない。武者を先にしてもらいたい」と志賀は厳しい語調で拒絶した。『白樺』の同人はみな「武者」と略する。志賀も「武者」と言って年上ではあるが、武者小路を尊敬して立てていた。野田は志賀の友情の厳しさをまざまざと見る思いがした。

しかし、この「手紙」も武者小路の疎開からの帰京によって、一回だけで終わった。野田は中断を残念にも思ったが、遠い不自由な田舎生活をしていた武者小路のためには喜ぶべきことであると納得した。

一九四五（昭和二〇）年一〇月一三日、志賀直哉は広島県府中町の溝井勇三（直井潔）に葉書を出しているが、その葉書に「野田君に番地教へて置いの（ママ）で「松葉杖」の出てゐる雑誌もう届いた事と思ひます」とある。直井潔（本名・溝井勇三）は一九一五（大正四）年四月一日広島生まれ、兵庫県滝川中学校を卒業し、神戸市湊東区（現・中央区）役所に勤務し、日中戦争に応召、徐州作戦に従事中、悪性風土病にかかり、全身関節麻痺して傷痍軍人療養所で養生、生涯身体障害者となる。志賀直哉との間に文通が始まり、一九四三年四月『改造』に「清流」を発表した。志賀の推薦で『文藝』第二巻第一号（一九四五年一月）に直井潔の小説「雨」が掲載され、続いて一九四五年八月『文藝』第二巻第六号に直井潔の「松葉杖」が掲載された。前述の「「松葉杖」の出てゐる雑誌」とはこの『文藝』八月号のことである。単行本『清流』は一九四六年に小山書店から刊行した。出版に際しては四六年には野田宇太郎は小山書店を退社していたので、野田は関与していないだろう。その後、直井潔の「淵」は第二七回芥川賞（一九五二年上半期）の有力な最終選考に残り、滝井孝作、川端康成は評価したが、舟橋聖一、佐藤春夫、宇野浩二、坂口安吾は否定的で、結局該当作品なしとなった。

野田宇太郎は一九四五年一二月、『文藝』一二月号を「太田博士追悼号」として発行し、これを機に『文藝』編集を辞し、河出書房を退社した。そして一九四六年一月、『藝林閒歩』編集の責任者として東京出版株式会社に入社した。野田の『混沌の季節――被占領下の記録――』（大東出版社）によると、『藝林閒歩』第一巻第六号（一九四六年九月）の福島繁太郎「フランス画家印象記　その一　クロード・モネー翁」は志賀直哉の推薦によるものであった。ある時、志賀が「福島さんはなかなか筆の立つ人だ。君、何かフランス画壇の印象記のようなものでもたのんでみたらどうだろう」と野田に薦めた。野田は福島コレクションと言われたフランス名画の所有者で、フランス美術雑誌『フォルム』の発行者でもある福島繁太郎を知ってはいたが、文章に接したことはなかった。志賀の推薦で野田は福島を探し出し、原稿を依頼し、「クロード・モネー翁」は九月号の巻頭を飾ることができた。

しかし、その後、野田宇太郎編集の『藝林閒歩』、『文学散歩』に志賀直哉が筆を執ることはなかった。

2

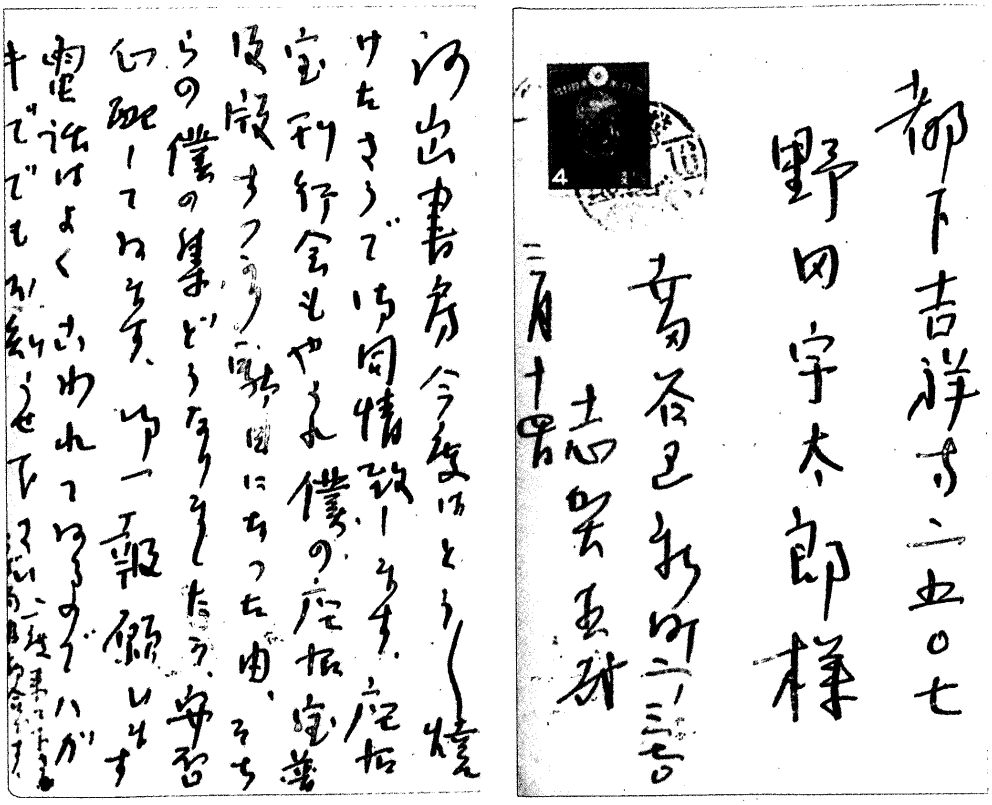
次の書簡は既に『志賀直哉全集』第一九巻（岩波書店、二〇〇〇年九月一九日）「書簡（三）」に収録されているが、写真公開は初めてである。また、野田宇太郎宛志賀直哉書簡は『志賀直哉全集』にこの書簡ただ一通のみ収録されている。

(1) 一九四五（昭和二〇）年三月一四日付4銭切手はがき
（消印）世田谷・20・3・16　東京都

都下吉祥寺二五〇七
野田宇太郎様

世[1]田谷区新町二ノ三七〇
志賀　直哉
三月十四日

河[2]出書房今度はとう〳〵焼[3]けたさうで御同情致します、座[4]右宝刊行会もやられ僕の座右宝[5]普及版すつかり駄目になつた由、そちらの僕の集[6]どうなりましたか、安否心配してゐます、御一報願ひます



(1)　1945（昭和20）年3月14日付野田宇太郎宛志賀直哉書簡

電話はよくこわれてゐるのでハガキででもお知らせ下さい、一度来て下さらば尚好都合です、

〔注解〕

1　世田谷区新町二ノ三七〇＝志賀直哉は一九四〇（昭和一五）年五月、東京市淀橋区（現・新宿区）諏訪町二二六から東京市世田谷区新町二丁目三七〇に移転、一九四八年一月熱海市稲村大洞台に移るまでここで暮らした。

2　河出書房＝一九三三（昭和八）年、河出孝雄（一九〇一～一九六五）が設立した出版社。野田宇太郎は一九四四年四月、第一書房の廃業によって退職、河出書房に入社し、出版部に配属された。野田は改造社の発行していた『文藝』を買収に成功、戦中、戦後の困難な時期に必死に刊行し続けた。四四年一一月河出書房『文藝』は野田宇太郎編集によって発刊し、一九四五年一二月、第二巻第九号「太田博士追悼号」をもって終刊した。

3　焼けた＝一九四五年三月一〇日、東京大空襲で河出書房（東京都日本橋区日本橋通り三丁目一番地）は社屋を焼失した。野田宇太郎の『灰の季節』（修道社、一九五八年五月）「東京最後の日　三月十日」のよると、「昭和通をさかいに日本橋通三丁目一帯はすべてるいるいとして余燼なほさかんな修羅場である。……河出書房の焼跡に立つ。

もちろん家の形はない。三階倉庫の焼け落ちて、まつかな熾の山になつて時折その火から白い灰がはかない色に吹きあげられる。その間に倉庫だけが黒くのこつてゐて誰も河出関係の人影は見当らない。」「ただ問題は『文藝』をどうして続刊してゆくかということであり、発行するばかりになつている三月号を何とか早くつくり出すことであつた。……河出氏とあつて、すでにすべての出版はもちろん、『文藝』の廃刊を決めかけている場にあい、その廃刊を思いとどまらせることになつた」「私は……自分が相当昂奮していることを意識しながら、圧えようとして圧え切れず、「文藝は私一人でも出してゆく」ときつぱり云つた。皆だまつていた。……河出氏は私の申し出に同意してくれた。」とある。

4　座右宝刊行会＝志賀直哉は一九二五（大正一四）年七月二日、橋本基らと座右宝刊行会を設立し、二六年六月美術図録『座右宝』を編者・発行者として刊行し、その序文を書いた。発行所は東京市本郷区湯島四丁目二〇番地、後に日本橋区江戸橋二ノ八　松慶ビルに移転し、東京大空襲で焼失した。一九四六年には淀橋区下落合一ノ四七三に建てた。

5　普及版＝一九四五年一月、『座右宝』改訂普及版の序を書く。同書は刷了後一九四五年三月一〇日の東京大空襲によって焼失、刊行されなかった。

6　集＝河出書房刊行の『現代日本小説大系』二七「志賀直哉集」（一九四九年四月三〇日発行）のことか。「志賀直哉集」は『現代日本小説大系』の第一回配本で、「暗夜行路」が収録された。東京大空襲当時はまだ出版準備中で、その進捗状況を心配したものか。おそらく活字も紙型も駄目になり、最初からやり直したので、その後四年もかかったのではあるまいか。もし既に発行した「～集」の紙型を心配しているのであったら、河出書房から発行したものとしては、河出書房版『白樺叢書』「志賀直哉集」（一九四〇年一二月一七日）と河出書房版『三代名作全集』「志賀直哉集」（一九四二年一月一五日）とがあるが、二冊とも野田宇太郎が入社（一九四四年四月）する以前の発行であるから除外してよかろう。

二　武者小路実篤書簡

1

武者小路実篤と野田との交流はどんなものであっただろうか。野田の『灰の季節』（修道社、一九五八年五月五日）によると、前述の『文藝』第二巻第七号（一九四五年一〇月）の武者小路実篤と志賀直哉「手紙」以外に、武者小路と野田との接点を見い出しえない。野田宇太郎編集の『藝林閒歩』、『文学散歩』にも執筆したことはない。志賀直哉よりも淡白な交流だったようである。

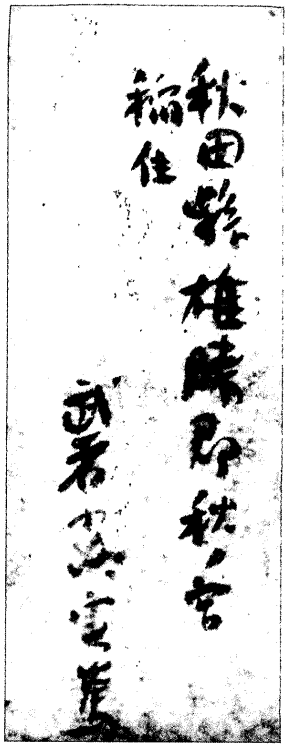
2

（2）（封筒の表なし。日付不明）

（封筒の裏）
秋田県雄勝郡秋ノ宮
稲①住

武者小路実篤

お手紙拝見、子②供に清書させ　僕が目を通しました。子供は寿③、子さんのことを出□□□のかを気にしてゐます。
僕は東④京の食ひ物がない心配がなけれ



(2)　日付不明野田宇太郎宛武者小路実篤書簡封筒（裏）

ば十[5]月には帰るつもりですが東京から
来た人は帰らない方がい、だらうと皆
言ふので、まだきめずにゐます。
こ、にゐる方が志賀と文[6]通するのには
のり気になるわけですが、少し遠すぎます。
その内郵便が早くつくやうになればい、と
思ひますが。

武者小路実篤

野[7]村宇吉[ママ]郎様

〔注解〕

1 稲住＝一九四五（昭和二〇）年六月、武者小路実篤は妻・安子、二女・妙子、長女（新子）の長男（雅世）と自分の四人家族で秋田県雄勝郡雄勝町秋ノ宮稲住に疎開した。これは一九四四年旭谷に秋田を案内されて、感じがよかったのと、稲住の経営者の押切の厚意に甘えたからであった。稲住温泉は山形から秋田に入って二つ目の駅の横堀から二〇キロほど山の中に入ったところにある温泉で、宿屋が一軒あるだけの山中の温泉場であった。
武者小路一家は同地で終戦を迎え、九月には帰京した。八月九日から九月八日までの日記にこの間の事情は詳しい。後に『稲住日記』と題して一九四七年一月、向日書館から刊行した。

2 子供＝稲住時代に実篤と同居していたのは、二女の妙子（一九二五年二月生まれ。当時、二〇歳）である。一九四八年志賀直哉の媒酌により安宅安五郎の三男侃三郎と結婚した。

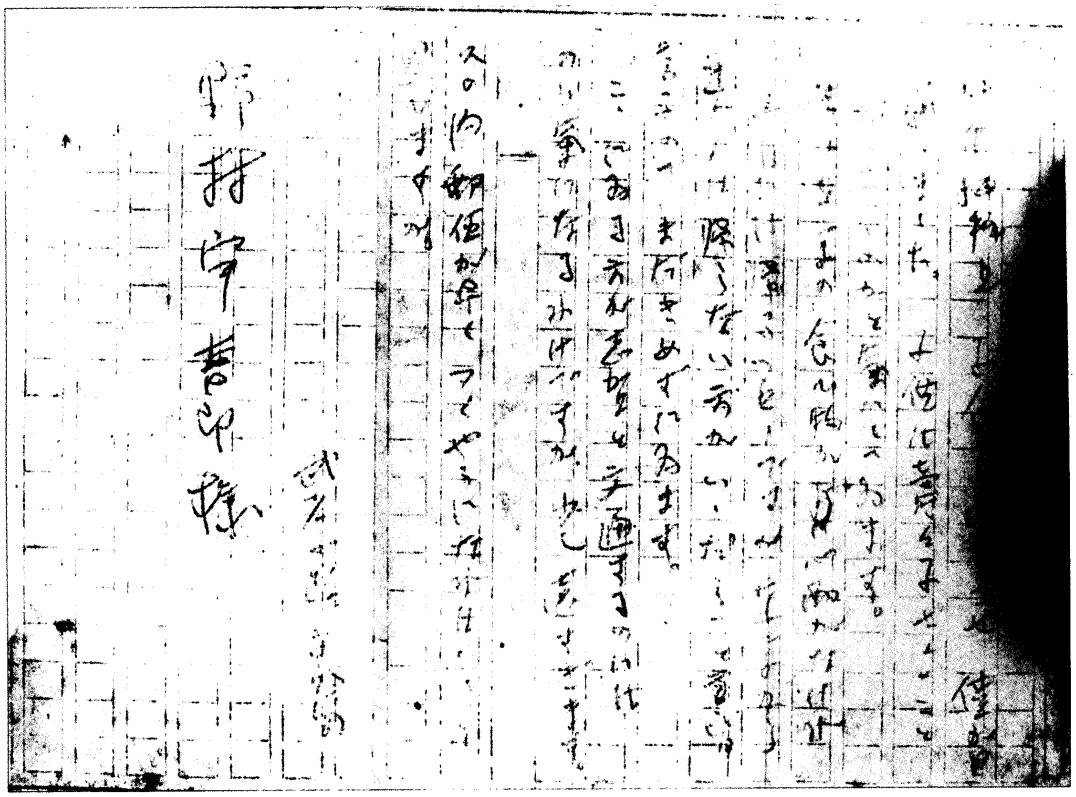
3 寿ゝ子＝志賀直哉の三女寿ゝ子（戸籍名「寿寿子」）のこと。一九二〇（大正九）年五月三一日生まれ。当時、二五歳。一九四三年一一月二二日中江孝男（農林省馬政局勤務）と結婚。一九四五年ごろは、福井県春江に疎開していた。

4 東京＝武者小路実篤の「稲住日記」「（一九四五年）八月二十一日」では「食物の問題さへ心配がなければ僕達も九月の末か十月始めには東京に帰らうかとも話してゐる」とある。

5 十月＝「稲住日記」は八月九日から九月八日までの日記であるが、九月八日の日記には帰京の予定は書かれていない。九月中に東京に帰ったと思われる。

6 文通＝『文藝』第二巻第七号（一九四五年一〇月）の武者小路実篤と志賀直哉「手紙」では、稲住からの武者小路書簡は一九四五年六月一二日・七月一四日付の戦中の手紙二通であって、戦後のものではない。

7 野村宇吉郎＝相手の届け先の名前を間違えるほど、浅薄な間柄であったというべきであろう。その後も武者小路と野田との交流はない。



(2) 日付不明野田宇太郎宛武者小路実篤書簡

三　里見弴書簡

1

里見弴と野田宇太郎との交流はいつから始まっただろうか。野田の『灰の季節』は『文藝』編集時代の記録であるが、この中に里見弴の名はない。野田の『混沌の季節――被占領下の記録――』（大東出版社）によると、『藝林閒歩』第一巻第九号（一九四六年一二月）に丸山金治という新人の小説「浮まくら」が発表された。京都弁による舞妓の手紙形式の美しい小説で、野田は「編輯後記」で、「小説「浮まくら」はその美しさにうたれた。目ざましい新人の作です。」と絶賛した。この丸山金治の小説を野田に推賞したのは里見弴であった。丸山金治（一九一五～一九四八）は神戸市生まれ、父の厳命で駒沢大学に入学したが、文学志望やみがたく一年で中退、明治大学文芸科に入り里見弴の指導を受ける。中山義秀の紹介で創元社に入社、のち改造社に勤務する。一九四三年ごろから肺結核が悪化、過労と不養生で死亡した。作風は繊細で清潔であると言われる。『藝林閒歩』第二巻第九号（一九四七年一二月）にも丸山金治は「夏の宿」を掲載している。しかし丸山の体はかなり蝕まれていたのだろう、死期の近いのを自覚して書き、壮絶な死を遂げた。

『混沌の季節――被占領下の記録――』に収載された野田の日記（一九四七年四月八日）によると、野田は芸術院会員になった里見弴のお祝いに鎌倉の自宅を訪ねたが、来客を避けて雲隠れしたとかで、家人にお祝いだけ述べ、祝い酒だけ一本置いてきた、とある。

野田宇太郎は一九四八年一〇月、『藝林閒歩』は「傷つき破れた潜水艦のように、しずかに水平線から姿を消してそのまま浮上しないことにし」て終刊とした。

一九六一（昭和三六）年一月、雑誌『文学散歩』を創刊した。そして野田は『文学散歩』一九六一年四月号を吉井勇の特集にしようと計画した。そこで野田は里見に原稿を依頼した。その返事が次の葉書である。しかしその後『文学散歩』に里見が執筆したことはなかった。

2

(3) 一九六〇（昭和三五）年一一月二四日付5円切手はがき

（消印）鎌倉　35・11・24　後0―6

東京ト武蔵野市吉祥寺
二五〇七
野田宇太郎様

鎌倉市扇ヶ谷二九一
電話　鎌倉一九七〇
里　見　　弴

御①申越しの件承知いたしました
枚②数のところは当方の
勝手にさせて頂きます
右は返事のみ　十一月廿四日

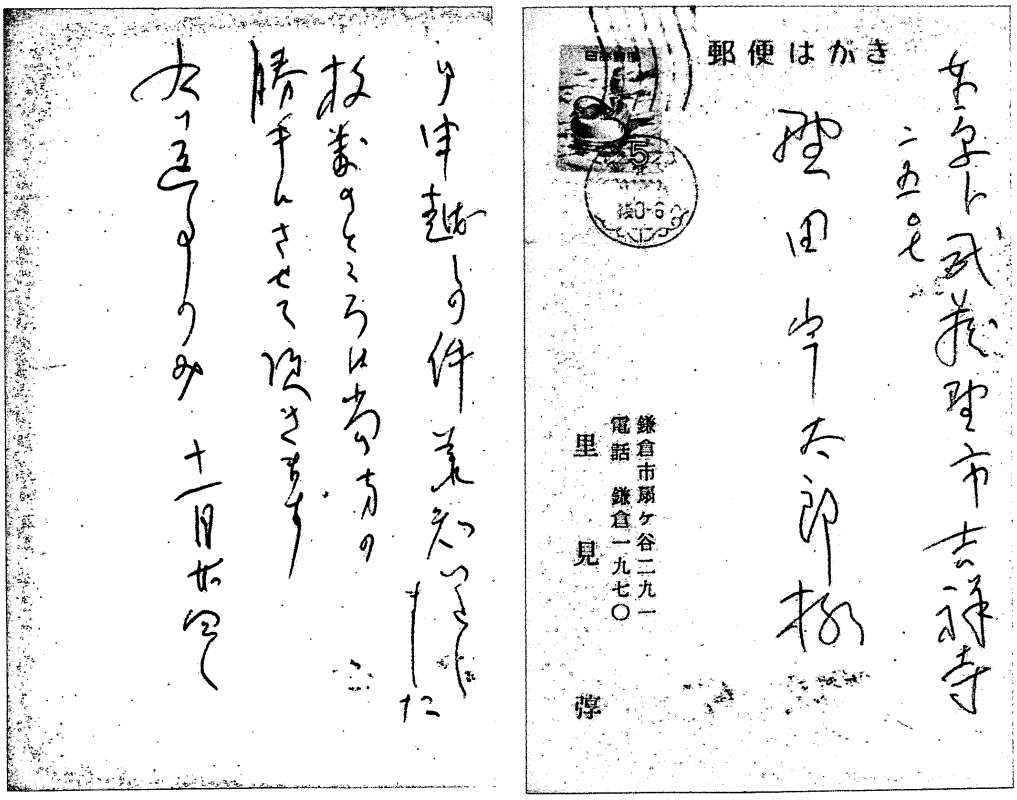
〔注解〕

1　御申越しの件＝野田宇太郎は里見弴に『文学散歩』一九六一（昭和三六）年四月号「吉井勇の想い出」の寄稿を依頼した。里見は寄稿を了承し、「吉井勇君と私と」を発表した。

吉井は一九六〇年八月京都大学病院で胃癌の手術を受け、退院後、一〇月一九日上京し、野田は吉井に会い、祇園の記録を採りたいので吉井、長田幹彦、中沢弘光（画家）、金子竹次郎（万屋主人）などと座談会を開くことを申し出て承諾を得ていた。しかし、吉井は同年一一月一九日京都の病院で肺癌により永眠。七五歳。

野田は吉井の死で急遽里見に「吉井勇の想い出」の寄稿を依頼し、六一年一月一八日、東京深川の「宮川」で、亡き吉井追悼の意を込めて座談会「祇園の文学」を開いた。当日は長田幹彦が急病入院のため欠席し、中沢画伯の祇園舞妓の絵のモデルとなった杵屋田鶴（杵屋六左ェ門夫人）が出席、野田が司会して行われた。この座談会を柱として一九六一年四月号は吉井勇追悼号となった。

里見弴はこの号に「吉井勇君と私と」を寄せ、吉井との交流を回想している。最初の出会いは蒲原有明の紹介であったかはっきりしないが、一九一〇（明治四三）年晩秋、日本橋大伝馬町瓢箪新道の三州屋でのパンの会に初めて参加した時のこと、鴻ノ巣で志賀直哉や吉井



(3) 1960（昭和35）年11月24日付野田宇太郎宛里見弴書簡

勇などと酔態を見せた時のこと、『スバル』『三田文学』『新思潮』『白樺』四誌合同の年四回雑誌を出す相談会を上野精養軒で催した時のこと、一九一八～一九年頃、国民文芸会が発起された時のこと、一九一九年一一月『人間』を創刊し、二年間編集で梁山泊のごとき観を呈し、茶屋酒と芸術的興奮に明け暮れていた時のこと、一九三二～三三年頃、下六番町で吉井家と里見の仕事場が隣り合わせだった時のこと、吉井の小田急沿線田園都市分譲地に隠棲していた時のこと、一九四七～四八年春鎌倉在住作家が近鉄前田社長の招待で講演旅行に出た時、京都の吉井と合流して女房同士が意気投合したこと、一九五三年一一月、里見の伴侶お良を亡くした時、吉井から「鎌倉の秋の寒さを思ひつつ良き人の死を京に悲しむ」の弔歌を電報で贈られ、涙にかき暮れたこと、大阪歌舞伎座の廊下で吉井夫妻と出会い、遠くから「歌を有難う」と目配せして、互いにこみ上げるのを抑えたこと、二、三年前、桂文楽から随筆集を贈られ、吉井が著者に「長生きも芸のうち」という言葉を与えていたが同感したこと、「すべて生物の成長とは、同時に老朽をも意味するものだ」と考えたこと、去年初夏、有島武郎の歌碑を山陰に姉達と観に行き、京都で吉井と京舞を見て痛飲したこと、吉井が胃の手術をした時のこと、一〇月二四日京都で吉井宅を訪ねようとして通り過ぎてしまったこと、などが懐かしく書かれている。

2　枚数のところは当方の勝手＝里見弴としては吉井に対する思いは万感こもごも字数の制限では語り尽くせないものがあったのであろう。『文学散歩』一九六一（昭和三六）年四月号「吉井勇の想い出」の中では最も長い七頁を使って書いた。

四　解説

今回はいわゆる白樺派の三人の作家を取り上げたが、編集者野田宇太郎との関係は、それほど濃密ではない。木下杢太郎のユマニテを信奉する抒情詩人野田宇太郎と人道主義と理想主義の白樺派との間には、かなり共通する部分があると思われる。しかし、文芸雑誌編集者としての野田宇太郎は、志賀直哉に雑誌を離れても個人的な尊崇と親近を感じていたようであるが、武者小路実篤と里見弴には特別な人格的接触はないと言っていいだろう。

志賀直哉書簡（1）は一九四五年三月一〇日の東京大空襲直後の混乱状況下で、自分の作品集の心配が書かれている。戦争末期の絶望的な虚脱と錯乱の中で、毅然として文学に生きる矜持を保ち、自己の作品の安否を憂慮する作家魂が見て取れる。

武者小路実篤書簡（2）は秋田県雄勝（おがち）郡雄勝町の稲住温泉に疎開していた時のものである。一九四四年、武者小路は旭谷に案内され秋田に来たが、感じがよかったのと、稲住の経営者の押切の厚意に甘えて疎開して来た。野田宇太郎は東京の志賀直哉と地方に疎開した武者小路との往復書簡を何とか文学的に生かしたいと思っていた。個人的な手紙を印刷することは、検閲しているようで、憚られるこ

とであるが、戦中戦後の東京と地方との文学者の思いを本音で語ってもらえば、それは単なる身辺消息の交換だけではなく、価値の転倒によって混沌を深めつつある日本社会に対する文明批評となり、混迷の渦の中にいる日本人に指針を示して欲しいと願ったのであった。『文藝』における「手紙」武者小路実篤・志賀直哉往復書簡は武者小路の帰京によって一回のみで中断してしまった。武者小路は稲住における疎開生活を『稲住日記』として、一九四七年一月、向日書館から刊行された。志賀の三女寿ゝ子に対する配慮も窺がえて暖かいものが流れている。

里見弴書簡（3）は野田からの「吉井勇の想い出」への原稿依頼に対する応諾の返事である。事務的な簡単な返信である。その中で「枚数のところは当方の勝手」とあるところに里見の吉井に対する熱い思い入れを汲み取ることができる。一九一九（大正八）年一一月、吉井勇・久米正雄・田中純・里見弴の四人が編集同人となり『人間』を創刊、この前後、国民文芸会が発起され、小村欣一、長崎英造、吉井勇、田中純らと親しくなり、一九二二（大正一一）年六月『人間』終刊まで二年間、悪友の梁山泊のごとき観を呈し、茶屋酒と芸術的興奮の明け暮れであったという。かように里見は二歳年上の吉井に親近感を持ち、「同士」ではなく、「友達」といふより、むしろ「仲間」「仲よし」とでも呼んだはうが似つかはし」（里見弴「吉井勇君と私と」）い関係が築かれていたのであった。